

主 題：信仰の確信をもっていますか？

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章3－4節

テーマ：聖徒は信仰の確信を持って生きることができる

きょうは少し皆さんとともに考えてみたい大切な質問があって、コロサイ人への手紙からのメッセージとなりました。その大切な質問は、「あなたは信仰の確信をもっておられますか？」という質問です。いかがでしょうか？あなたは間違いなく信仰の確信を持って生きておられるでしょうか？私たちは聖書のみことばを聞いているかもしれませんが、毎日お読みになっているという方もおられるでしょう。毎日個人的に神にお祈りをささげ、また私は以前に信仰の告白をし、確かにイエス様を信じましたというお祈りをしましたという方もおられるかもしれません。バプテスマを受けて、私は教会のメンバーです、毎週教会に来て礼拝を捧げていますと言われる方もおられるでしょう。でも皆さんの心の中で、もし信仰の確信がなければ、これは大変な、また大切な問題です。信仰の確信がなければ、皆さんご自身の信仰も信仰生活も不安定なものとなります。救いの喜びを、毎日神に感謝することも難しくなります。また、あなたの救いが確かなものでなければ、将来についての不安や自分の死後についても大きな不安を抱えることにならないでしょうか？あなたは信仰の確信をもっておられるでしょうか？この教会のあるクラスで、私は本当に救われているのだろうか、信仰の確信をもっているのだろうかという質問を考える機会がありました。かつてこの教会に来ていたのだけれども、離れてしまったあの兄弟姉妹。彼らは信仰を持っていたのだろうか？昔、教会学校で一緒に過ごした友人たち。一緒に神に仕え、奉仕をともにしていたあの兄弟姉妹。神を信じると言っていたのに今彼らはどこにいるのだろうかと思われたことはないでしょうか？私たちが信仰の確信を持って神の前に生きるということはとても大切なことです。きょうのテキストであるコロサイの手紙1章で、パウロはとても興味深いことを記しています。

コロサイ1：3－4

「:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。」

パウロは、3節でパウロとテモテがコロサイの聖徒たちの信仰とコロサイの聖徒たちのために祈り、「主イエス・キリストの父なる神に感謝して」いると述べました。パウロはコロサイの聖徒たちの救いを神に感謝したのです。しかし、実はパウロは、コロサイ教会の中に直接会ったことがない人たちがいたと述べています。1ページめくっていただいてコロサイ2：1で、パウロは「あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」と言っています。パウロは直接会ったことがないコロサイの教会の聖徒たちのことを感謝したのです。コロサイの教会の聖徒たちは信仰を持って生きていて、その信仰の確信を持って生きていくということを、パウロはその救いを神に感謝したのです。

先ほど私たちが考えた問題に戻ってみてください。私たちは自分自身の信仰の確信があるのかどうかを考えました。私の家族、私の子どもたち、私の友人たち、親族たち。間違いなく彼らが信仰を持って生きていくのかどうか、私たちは確信して神に感謝することができるでしょうか？パウロはコロサイの教会の聖徒の救いを、信仰の確信を、間違いのないものだと神様に感謝しました。私たちは信仰の確信を持っていると、神に感謝することができるでしょうか？きょうのメッセージの命題は“聖徒は信仰の確信をもつて生きることができる”ということです。事実パウロは、エパfrasという人物から、コ

ロサイの教会の聖徒たちについて聞いた時に、間違いなくコロサイの聖徒が救われていると確信することができました。そして神に感謝したわけです。

では、どうしてパウロはコロサイの教会の聖徒たちが間違いなく救われていると、信仰を持っていると確信できたのでしょうか？本日のテキストからご一緒に見ていくことにしましょう。

A. キリスト・イエスに対する信仰 4節

まず1：4で、パウロがコロサイの聖徒たちの救いを確信できた一つのポイントが出てきます。一つのポイントはキリスト・イエスに対する信仰でした。ここに出てくる「信仰」というギリシャ語は単数形で書かれています。大勢のコロサイの聖徒たちがいたのですが、彼らはただ一つの信仰を持っていたということです。いろいろな信仰があるわけではないのです。たった一つの信仰があったのです。その信仰がキリスト・イエスに対する信仰であったということです。パウロは、コロサイの聖徒たちのキリスト・イエスに対する信仰を聞いた時に、コロサイの聖徒の信仰を確信し、間違いなく神から救いをいただいていると神に感謝しました。

1) 本当の信仰に欠かせない要素

ではまずそもそも、私たちが救われるに当たって、何を信じることによって救いをいただくことができるのでしょうか？何を信じたら救われると、私たちは自分の子どもに教えることができます？友人や親族がお盆に帰って来て、あなたが信じている神様について教えてください、何を信じたら救われるのですかという質問を受けるならば、皆さんはどのようにお答えになるのでしょうか――。

まず、本当の信仰に欠かせない要素について、ご一緒に見ていくことにしましょう。

① キリストを救い主とすること

キリスト・イエスに対する信仰を持つに当たって、本当の信仰に欠かせない要素の第一は、キリストをあなたの救い主とすることです。キリストをあなたの救い主とすることなしに、あなたが神から救いをいただくことは決してできません。パウロは、4節で「キリスト・イエスに対する」信仰と言いました。この「キリスト」というのは「油注がれた者」や「メシヤ」、「救い主」という意味です。旧約聖書において王様や祭司が選ばれました。例えばダビデ王が選ばれた時、この人は神様が備えられた、神様が選ばれた王ですと言って、その頭にサムエルが油を注ぐのです。みんながはっきりと神様がお定めになった王であり、祭司であるということを知ることができるように油を注いだのです。この「キリスト」とは「神が備えられた救い主」という意味です。しかもここには“Evn”という前置詞があって、「キリスト・イエスによる信仰」とか、「キリスト・イエスに基づく信仰」を持つことを意味します。聖書は神がたったおひとりだということを教えています。

「初めに、神が天と地を創造した。」と、創世記1：1にあるように、この世界をお造りになった神は唯一の神、創造主です。そしてそのことを聖書は啓示しています。啓示とは、みんなにわかるようにはっきりと表して明らかにすることです。聖書は神がおられることは、この自然の世界を見た時に、はっきりと明らかであって、だれも弁解の余地がないと言います。この時計が勝手にできたのではなく、だれかがデザインし、材料を集め、作ることがなければできないのと同様に、この世界の空も、海も、山も、川も、花々も、いのちあるものも、そのすべては神様の作品であって、私たちはそれを見る時に神様の偉大さを知ることができるのです。人々は、神様はいない、知らないと言うかもしれませんが、でも神様の御手のわざを見る時、私たちはその神様のすばらしさを知ることができるのです。

また、私たちの心に与えられている良い心である良心も、神がおられることを私たちに悟らせませす。ですから、私たちは、神がおられることを自分自身の心において悟ることができるのです。でも、私たち人間がすることは、神を神としてあがめず、感謝もせず、不滅の神の御栄えを鳥、獣、はうもののかたちに似たものと代えてしまった。これが現実の世界で起こっていることです。私たちは自分の人生だと言って、神様に言い逆らう態度をとるのです。ちょうど親に逆らう子どもが家出をすると、親不孝な

ように、「お父さん、お母さんなんて知らない」という態度が、お父さん、お母さんを悲しませるように、私たちが神様など知らないと言って、自分の神を作り、自分自身の思うままに生きること、この的外れな生き方が罪です。それゆえに、私たち人間のすべてが罪人です。聖書は警告しています。神を神として敬わず、あがめず、神の教えに背き、神の前に的外れな生き方をしている者は神の前に罪人だということです。

私が子どものころ、イエス・キリストを救い主と信じる前に、「あなたは死んだら天国に行きますか？それとも滅んで地獄に行きますか？」という質問を受けた時に、「天国に行くと思います。なぜなら私は新聞に載るような悪いこともしていないし、犯罪を犯しているわけでもありません。ほかの人と比べるとまだましな方だと思います。比較すると多分天国に行くんじゃないでしょうか、地獄に行くような罪は犯していないと私は思います」と答えたことがありました。神をお信じになっていない人は同じようにお答えになることがあるかもしれません。でもその根拠はどこにあるのでしょうか？その人の考えでしょうか？そう思うからでしょうか？それともほかの人と比べてましな人間だから、天国に行ったり、滅んで地獄に行ったりするのでしょうか？何が基準なのでしょう？聖書は明確に答えをくれています。ヘブル9：27で「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」と明確に書かれています。私たち人間のすべてがいつの日か死を迎えます。聖書は人が死ぬだけでなく、神のさばきを受けることが定まっていて、すべての人間の罪が永遠のさばき、滅びであることを警告しています。わかりやすく言うなら、すべての人が死んで永遠の滅び、地獄に行くことが定まっているということです。聖書が言う私たちの罪は、神に対する罪です。もし私たちがだれかにけがを負わせてしまったり、何か損害を与えてしまったら、私たちはその相手と和解するためには、その人のところに行って罪をお詫びし、謝罪したり、償いをして弁償する必要があるかもしれません。でも神に対する罪の解決は、神が良しとされる、神が備えた救いの方法以外にないのです。ですから、聖書が言うのは、このキリストをあなたの救い主とする以外に、救いの方法はどんな宗教にも、どんな修行にも、どんな行いにも決してないということです。

神が与えてくださった救いのすばらしい知らせが福音です。I コリント15：1－5で、パウロはその福音について次のように述べています。「：1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。：2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の**ことば**をしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。：3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、：4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、：5 また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」と。パウロは福音によって救われると言いました。神のことばである聖書は、「もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の**ことば**をしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです」とあかしします。神に対する罪の救いのためには、神が備えてくださった救い主を受け入れ、私たちが悔い改める必要があります。このキリストが私たちの救い主です。聖書が言うとおりに私たちの罪のために死んでくださり、罪の贖い、罪の代価をイエス・キリストが受けてくださった十字架の贖いによって成し遂げられたことを信じ、受け入れることが、あなたの救いの条件です。聖書は「**聖書の示すとおりに**」とこの救いが神のご計画に従ったものであることを教えています。旧約聖書で預言されていたとおりに、あなたのために神が救いの計画を成し遂げてくださったのです。

聖書が示す福音を受け入れるためには、次の三つのことが少なくとも必要です。レジメにまとめておきましたが、まず一つ目に、創造主である神を認めることです。そして神を信じない者、神を受け入れず、認めようとしない者は神に対する罪を理解することができません。二つ目に、神に対する自分の罪

を認める必要があります。自分の罪を認める者は、自分が死後にさばきを受けることを認めます。逆に自分の罪を認めない者は、救われることは決してありません。自分が罪人であることを認めないし、神の前に救いを下さいとひざまずいて祈ることがないからです。三つ目に、自分に救い主が必要であることを認めることが必要です。自分が神に対して犯している罪を、神が備えてくださった救い主を認めない者は、この罪の悔い改めをして神からの救いをいただくことができないからです。

主イエス・キリストご自身も、ご自身キリストが救い主であることを、神の子であり、救い主であることをあかしされました。マタイ26：62-64で、イエス・キリストが十字架にかかれる前に、なぜイエス・キリストが十字架につかれたのかという裁判が書かれています。「:62 そこで、大祭司は立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています、これはどうなのですか。」:63 しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」:64 イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりで。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るようになります。」と。一般的に、その裁判に立つ人がどんな罪を犯したのかについて、私たちは裁判を設けます。いろいろな証言が出てきて、その罪について確認がなされるのです。しかし、イエス・キリストの裁判は、今お聞きになったように、どのような罪を犯したかではありませんでした。イエス・キリストの裁判は、イエス・キリストが一体どなたであるのかということが問題になったのです。主イエス・キリストは、ご自身が神の子キリストであるかという質問を、大祭司から受けた時に、キリストであるということをお認めになりました。神の子であるとあかしされたのです。大祭司にも、人々に対しても隠すことはなさいませんでした。しかし、人々はイエス・キリストをキリスト——救い主とは認めず、自称した者、神を冒瀆する者と考えて十字架につけてしまいました。

あなたはいかがでしょうか？あなたはイエス・キリストをあなたの救い主とされているでしょうか？間違いなく主キリスト・イエスはあなたの救い主でしょうか？あなたは救いの確信を持っておられるでしょうか？もしまだ救いを受け入れておらず、お信じになっていないならば、どうぞイエス・キリストを罪のさばきの救い主として信じ、受け入れてください。信じない者とならないで、イエス・キリストをあなたの罪のために死んでよみがえった救い主として受け入れてください。

そして、もしキリスト・イエスを救い主として受け入れておられるのであれば、キリストをあなたの救い主とするというのはどういうことか、少し考えてみましょう。それは、まず創造主であるまことの神を信じ、受け入れることです。あなたはイエス・キリストをあなたの救い主として受け入れておられますか？またキリストを救い主として生きておられるでしょうか？イエス・キリストを救い主として受け入れた者は、間違いなく神の前に謙虚な態度を取ります。なぜなら私たちの罪が示され、神様に対して私たちがどれほどの罪を抱えているのかを私たちが気づかされ、神様の前にひざまずいて救いを求めるからです。「心の貧しい者は幸いです」（マタイ5：3）とイエス・キリストは言われました。私たちのうちには良いところが何もない、神様の前に罪を持った空っぽの人間であることを示されることを通して、謙虚な者として救いを求め、イエス・キリストはそのような心の貧しい者が天国の民であることをお示しになりました。このイエス・キリストの救い以外に、全くほかに救いの方法はありません。キリストを救い主として受け入れる者は、自分を神様の前に謙虚な者として生きていこうとします。

また、神の一方的な恵みによって救われた私たちは、救いを感謝する者として生きていきます。本当にあなたがキリストを救い主として受け入れ、救いを喜んでおられるなら、あなたの周りの状況がどんな状況であっても、いろいろな必要が乏しいことがあったとしても、私たちの心の中には神様への救いの感謝、喜びの歌があふれてくると思います。あなたの心の中には、神様に救われた賛美や喜びがあるでしょうか？救い主イエス・キリストを受け入れ、従順に従うことが、あなたの当然の姿として、毎日

そのような生き方をされているでしょうか？私たちは立ち止まって考える必要があります。私はキリストを私の救い主として、今、受け入れているのだろうか――。

また、キリストを救い主とする者は、神を信頼して生きていきます。救いを与えてくださった神を信じ、その信仰の生涯において神を信頼して生きるからです。私たちはキリストを救い主として安心して信仰生活を過ごすことができます。神のひとり子であるイエス・キリストを十字架につけ、私たちの罪の身代わりとしてお与えくださった神は、私たちを愛し、私たちを助け、日々必要を満たされるという約束を与えてくれています。私たちは神を信頼して生きることができるのです。また安心して、私たちの死の瞬間を迎えることができます。安心して死ぬことができます。なぜなら、私たちの信仰生活は、死んだ後も神と主イエス・キリストとお会いして、主を礼拝し、神と永遠を過ごすという希望があるからです。もしそのような信仰があなたにあるなら感謝なことです。でも、もしそうでないならどうぞきょうのメッセージを思い返してください。このみことばを思い返してください。本当の信仰に欠かせない要素とは、あなたがキリストを救い主として信じ受け入れることにほかなりません。

②キリストを主とすること 3節

さて、本当の信仰に欠かせない要素の二つ目は、あなたがキリストを主とすることです。コロサイ 1：3で「私たちの主イエス・キリストの父なる神」と、パウロは言っています。この「主」ということばは“キュリオス”ということばで「主人」とか「主権者」、「王」といった意味です。つまり、キリストに対する信仰とは、キリストを主とする信仰です。私たちはキリストを自分自身の主、主人、支配者である王として受け入れ、従順に従うことが求められていると聖書に記されています。あなたはキリストをあなたの主として受け入れておられますか？そのように生きておられるでしょうか？イエス・キリストを自分の罪からの救い主として受け入れたいと願う人は大勢おられるでしょう。でも聖書が語るのは、イエス・キリストこそがあなたの主であり、神であるということです。あなたはキリストを自分の主としているでしょうか？自分を捨て、主を愛し、主を第一として従う者が、イエス・キリストの弟子であるとイエス・キリストは語られました。ルカ 9：23で「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われました。またルカ 14：25－27でイエス・キリストは、一緒に歩いていた大勢の群衆を振り返って「:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができます。:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」と言われました。ほかの聖書箇所でもイエス・キリストは繰り返して、イエス・キリストの教えを聞いて、ともに歩いていた人々、パンを食べて満足し、イエス・キリストこそが預言者だ、救い主だと考えていた人たち、一緒に集まり、自分は救われていると考えている人々に対して、イエス・キリストを主とする者は自分を捨てる必要があると教えられました。自分を捨てるとは、自分の持っていた価値のあると考えるものや、しようとする事、自分の家族や自分のいのちよりも、どんなものよりも、主イエス・キリストを愛し、イエス・キリストを主としてあがめ、礼拝し、従うということです。

先ほども見たとおり、「主」というのは主人であり、王です。あなたのすべてを捨てて、何よりもイエス・キリストを第一として従うことです。ある人は罪からの救いを得たい、キリストを救い主としたいと願うかもしれませんが。しかし、キリストをあなたの主とし、受け入れることなしに救いをいただくことはできないのです。かつてイエス・キリストのところに、同じように永遠のいのちを求めて来た人物がいました。金持ちの青年です。身分も確かな役人でした。マタイ 19：16－22で、次のように書かれています。「:16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」:17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りな

い。」:18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。」:19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」:20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」:21 イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」:22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。」と。ここで登場する青年は、自分自身が救われていない、いのちに欠けているということに気づいていました。だからイエス様のところに来たのです。そして永遠のいのちを得るためには何をしたらよいかと質問しました。しかし、彼には問題がありました。まず彼は「何をしたらよいか」と、自分の行いによって救われると考えていたのです。イエス様は律法について語られました。律法について、私たちが謙虚に考えるなら、自分が神の前に完全にそれを行うことができない罪人であることが示されるのです。この青年は、自分はそれを守り行っていると言うのです。イエス・キリストは、自分の財産をすべて売り払って、貧しい人たちに分け与え、その上で私についてきなさいという命令を与えました。そう言われた時に、彼は自分の財産を大切に考えて、イエス・キリストのもとを去ったのです。彼は永遠のいのちと自分の財産のどちらを大事にしたのでしょうか？彼はイエス・キリストを主とすることと、自分の財産を大事にすることと、どちらを愛したのでしょうか？彼は永遠のいのちを求めていました。でも彼はキリストを主とし、何物よりも第一とし、自分のすべてを捨てて、主イエス・キリストに従うということをしなかったのです。悲しい選択でした。彼にとってはキリストを自分の主とすることよりも、自分の財産が大切だったのです。

私たちはどうでしょうか？キリストを主とすることは何物よりもキリストを愛し、自分の主、神であると認め、従うことです。つまり真心を尽くして、キリストに従い続けることです。あなたはいかがでしょう？キリストを自分の主とされているのでしょうか？自分の夢や自分のやりたいことや自分の価値があると考えていたもの、自分の財産や地位や名誉、それらのものよりも自分の家族や自分のいのちよりもイエス・キリストを第一に愛して、主としてあがめ、従っておられるのでしょうか？ことばをかえてみましょう。イエス・キリストが今ここにおられて、あなたが救われるためには、あなたの全財産を売り払い、そして私について来なさいという命令をされたら、あなたはその命令に従われますか？イエス・キリストを主とし、第一とし、従うというのはそういうことです。今、私たちは全財産を売り払い、献金しということを命じられているわけではありません。でも、私たちが主イエス・キリストを自分の主とし、生きるということは、私たちがこの主に従順に従うということです。神のみこころを求めて生きるということです。

私にとって、この「主人」というのは、余りなじみのあるものではありませんでした。今の日本では主人に対する奴隷という制度がないからです。でも“デュロス”という「奴隷」ということばが聖書に出てきます。私たちイエス・キリストにあって救われた者は、罪の奴隷から義の奴隷とされた者です。昔、私の母校である清教学園という中学校で、英語で降誕劇をした時に、この主人とか主、王について考える機会がありました。降誕劇なので、ヘロデ王と兵士が出てきます。中学生のセリフですから短いセリフなのですが、ヘロデ王がいろいろな巻き物を持って来いと言うと、“Yes, sir”と言ってすぐ動くのです。そして、「連れて来い、学者たちを」と言う時、“Yes, my lord!”と言ってすぐ従うのです。私たち今は主人や王というものを身近に置くものではないかもしれませんが、でも、私たちが主に対して神様のみこころを求め、耳にし、それにすぐに忠実に従うかどうかというのは、私たちがイエス・キリストを主としているかどうか、その態度に現れるのです。皆さんにとってはいかがでしょうか？あなたはご自分がイエス・キリストを主とされているかどうかを考えてみてください。あなたがイエス・キリストをお信じになったその時から、今まで時間がありました。その時間の中で、皆さんはキリスト

を主となさっていたでしょうか？神のおことばからそのみこころを聞いた時に、従順に「はい」、
“Yes, sir”、“Yes, my lord!”と従ってこられたでしょうか？あなたの生涯の中で絶対的な権威を持つお方だったでしょうか？学校の進路、仕事の選択、結婚の判断やそのほかの毎日のいろいろな決断や判断の中で、神のすばらしさを現すことを願い、そして神のみこころを求めて決断されたでしょうか？言いかえるならば、イエス・キリストはあなたの主であり、あなたの王であったでしょうか？もしいつもそうでなかったのであれば、私たちは悔い改める必要があります。そして私たちは今、私の主はイエス・キリストであり、私はこの神のみこころに従うのだと決心することができるのです。口先だけで主よ、主よと言うのではなく、父なる神のみこころを行う者として、私は生きていくのだと、私たちは決心しなければなりません。それは主が教え、命じられたからです。それはキリストをあなたの主とみなさいということです。きょうも、今週も、これからもどうかキリストをあなたの主として生きていきましょう。

以上見てきたとおり、本当の信仰に欠かせない要素とは、キリストをあなたの救い主とし、キリストをあなたの主とすることです。私たちはイエス・キリストを自分の救い主とし、自分の主とすることなしに神から救いをいただくことはできません。

2) 本当の信仰を確証させるもの

さて次に、本当の信仰を確証させるものについて、二つのことをご一緒に見ていきたいと思えます。

①神のことば

コロサイ 1 : 5 - 6 に信仰を確証させるものの一つ目が出てきます。「:5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。:6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそうにしてあなたがたに届いたのです。」と書かれています。聖書が言うのは、コロサイの人々が持っていたキリスト・イエスに対する信仰は、福音の真理のことばによるものであったということです。神のことばが信仰の確証を与えます。なぜなら私たちの救いとは人間が考えたことではありません。自分で作り出し、自分で努力し、自分で修業して得た救いでもありません。ただ、神が救いを備えてくださり、神のみことばによって明らかにされ、神の恵みであり、神の愛の計画によって与えられた救いです。それゆえ、この信仰を確証させるものは神が与えてくださる神のことばです。神のみことばが私たちに信仰を確証させます。信仰の確信はどのようにして与えられるのですか？神のみことばです。信仰の成長は何によって与えられるのですか？神のみことばです。私たちはどうやって神を知り、より成長していくのでしょうか？神のみことばです。

かつてイエス・キリストとともに十字架についた犯罪人のひとり、このイエス・キリストからことばによって、あなたは天に入りますという保証がなされました。ルカ 23 : 43 に「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と書かれています。このイエス・キリストとともに十字架につけられたふたりの犯罪人のうちひとは、最初はイエス・キリストについてあざけり、ののしっていました。十字架から下りてこい、私たちに助けろと言ってあざけたのです。でも、この人物は十字架についている時間の中で、イエス・キリストが神であり、罪のないおかたであり、自分を罪から救って、天に入れてくださる権威のあるおかたであることを信じました。だから、罪を悔い改めて、主に救いを求めたのです。彼が救いを求めた時に、イエス・キリストから約束をいただきました。「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」という約束です。だから絶対に間違いなく天国にいるという保証ではないでしょうか？イエス・キリストご自身からの約束であり、保証があるのです。

今、私たちは主イエス・キリストから「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」という約束を直接聞くことはできないかもしれませんが。でも私たちは聖書に書かれているイエス・キリストのことばによって、また神のみことばによって信仰を保証されます。ヨハネ5：24でイエス様は「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」という約束をなさいました。このみことばが教えることは、主イエス・キリストのことばを聞いて神を信じる者が永遠の命を持つということです。聖書のイエス・キリストのことば、神のことばは私たちに救いの方法を教えるだけでなく、神の約束、神の誓いとして、私たちが救いを確信することができるようにしてくれます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とヨハネ14：6でイエス・キリストは言われました。イエス・キリストこそが道であり、真理であり、いのちなのです。この方を通してでなければ、父のみもとに行くことができない。この約束のとおり、おことばの宣言のとおり、イエス・キリストのことばは私たちの救いを確証します。

私たちはどうでしょうか？信仰のもとである神のことば、聖書のことばに立っておられるのでしょうか？もし私たちが自分の信仰の確信について不安を覚えるとしたら、どうしたらいいのでしょうか？皆さんだったらどうなさいます？自分の子どもがイエス様を信じているかどうかわからない、救われているかどうかわからないという質問を受けた時、神様の約束であるみことばに立ち返ることで。聖書の約束は神様の救いを保証します。私たちが社会において、例えば保険の契約等、いろいろ契約を結ぶ時には契約書を交わすはず。その契約書は、お互いにこういうふうにしましょうという取り決めをし、保険であればサインをして、振り込みをして初めて成り立ちます。皆さん、保険ではありませんが、私たちの救いは神様から与えられている約束であり、契約です。私たちはそこにサインをするわけではありませんが、私たちが信仰に不安を覚えた時、契約であれば、私たちは契約書を読むのです。そこに自分のサインがあるのを見るのです。保険であれば振り込まれている領収書を見るのです。私たちは救いについて、神の約束である聖書のことばが何と言っているかに立ち返り、神のことばを信頼し、救いの確証を得るのです。ヘブル6章には船と錨の関係で神の約束と誓いについて書かれています。海辺に船がいて、この間のように台風が来て、波が荒れている時に、もし船に錨がなければ、とどまらず流されていくのです。でも、私たちの信仰の確証、救いの錨は神の約束のことばであるみことばであり、神の誓いなのです。神が救いを確かなものとし、神のことばが私たちに約束し、あかししてくださるのです。私たちの魂の錨は神の約束であり、神の誓いなのです。私たちは神のみことばで信仰の確証を得ることができます。

②神の御霊、聖霊

二つ目に、私たちに信仰の確証を与えるものは神の御霊であり、聖霊です。ローマ8：14-17でパウロがそのことを教えています。「：14 神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。：15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。：16 私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。：17 もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。」とあります。16節をご覧いただくと、聖書は「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます」と語ります。神の子どもとされていること、つまり神が与えてくださる救いの確信、信仰の確信は聖霊があかししてくれると聖書は言うのです。今、ご覧いただいたのはローマ人への手紙でした。パウロは意図的にローマの人たちに対してこの手紙を書いています。実はローマには養子の制度がありました。別の家に養子としてもらわれていく制度です。バークレーによると、それはものすごく厳格な制度のようで、だれかの家からだれかの家に養子に行く

時には、通常7人以上の証人が裁判の席に着き、厳格な手続きのもとで進められ、その人の持っていた以前の家にあったすべての財産や関係のあった家族、その人の人間関係やそのほかその家と関係するすべてのものを捨て去らないと、新しい家の養子になることは決してできなかったのです。私たちはかつてはサタンの支配下にあつて罪の奴隷でした。御怒りを受けるべき子らでした。でも神の救いによって、私たちはイエス・キリストにあつて神の子どもとされました。養子となる者は、以前の家のすべてを捨てるだけでなく、新しい家の父親の庇護のもとに入ることが約束されていました。その父親のもとで、養子とされた者は父親だけでなく、その家族が新しい家族となり、その父親の新しい子どもとして父親は子どもを守り、相続をする時にも、ほかの子どもと同様に共同相続人となったのです。このローマの制度を良く知っているパウロは、ローマの人たちに手紙を書いたのです。そして私たちが神の子どもとされ、その証拠が私たちに与えられている聖霊であり、私たちの霊もあかしすると言うのです。

私たちの霊、心はこう言います。確かに、私たちは神の約束であるみことば、聖書に基づいて救いをいただいたと。先ほど見たようにみことばに戻るのです。私たちの心が、霊があかしするのです。でも、同時に聖霊なる神様が与えられ、私たちが神の子どもであることが明らかにされるのだと聖書は教えているのです。同様にエペソ1：14では「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証」であると書かれていますし、エペソ4：30では「聖霊によって証印を押されている」と記されています。まだまだほかの箇所でも記されていますが、私たちが本に自分のものだという時は名前を書きます。皆さんの聖書はそうかもしれません。印鑑を押すのです。当時は牛やいろいろな家畜にも焼き印を押したのです。神は私たちが神のものであるという証拠のために、証印として聖霊なる神様を与えてくださったのだと聖書は言うのです。私たちは救われて神の御霊によって生きる者です。神の御霊が与えられて、今生きる者です。聖霊は私たちにみことばを悟らせてくださいます。聖霊は私たちに罪を気づかせてくれます。だから、私たちは神の前に罪を悔い改めて、救いをいただくことができたのです。これは聖霊なる神様の助けと働きがなければ決してできないことでした。また、私たちが救われた後で神に祈り、神を礼拝し、生きていくことは聖霊なる神様の助けによるのです。

ここで私たちが問わないといけないことがあります。それは私たちが救いをいただいた神の子どもとして、聖霊によって、御霊によって歩んでいるのかということです。聖書はガラテヤ5：16で「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と言います。かつて救われる前、私たちは罪を犯す以外のことできませんでした。救われていなかったからです。でも救われた私たちは、御霊によって歩むことができます。私たちが神の子どもであるならば、この世と調子を合わせたり、自分の欲望に従って生きるのではなく、自分の考えで判断するのではなく、神のみことばが何と言っているのか、何が神のみこころであるのか、聖霊なる神の助けをいただいて、日々私たちが神のみこころを行うことを喜びとするのです。私たちは神の前にみこころを求め、聖霊なる神様によって歩んでいるのでしょうか？

B. すべての聖徒に抱いている愛

さて、ここまで信仰の確信は救いを与えてくださる神の約束であることをみことばが保証し、また神の聖霊が私たちに与えられていることをご一緒に見てきました。これは私たちの救いの確証でした。コロサイ1：4には、パウロがコロサイの聖徒の救い、信仰を確信したもう一つのことが出てきます。それは愛です。4節で「すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです」とパウロは、コロサイの聖徒の愛について語りました。どうしてパウロは、コロサイの聖徒の愛について聞いた時に、コロサイの聖徒が救われている、信仰の確信を持っていると確信し、神に感謝したのでしょうか？

1) 御霊の実であること

同じコロサイ 1 : 7-8 にそのヒントがあります。聖書の文脈を確かめてみましょう。「:7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、:8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。」と書いています。8節で、パウロは「御霊によるあなたがたの愛」と言いました。一つ目は、この「愛」は「御霊の実」だからです。「愛」は“アガペ”ということばが使われています。友情とか夫婦の、もしくは親密な性的な愛という意味ではなく、この愛は単数形で書かれていて、たった一つしかない愛です。いろいろな種類があるわけではないのです。つまり神が私たちに与えてくださった愛であり、御霊の実である愛だということです。私たちは信仰の確証をさせるものとして聖霊が与えられているということをご一緒に見てきました。そして今、ここで私たちは聖霊の実としての愛が現されていることを通して、パウロは救いを確信したと見て取ることができます。聖霊の実である愛が明らかとなり、周りの人たちに明らかになったわけです。パウロは、コロサイの聖徒たちのキリスト・イエスに対する信仰だけではなく、すべての聖徒に対して抱いている愛を聞いた時に、彼らの救い、彼らの信仰を確信し、神に感謝しました。

また、聖書は聖霊が与えられた証拠は、聖徒の持つ愛であると言っています。この愛は「抱いている」とあるように現在形です。興味深いことは、ある人たちが言うように、もし異言を語ることが聖霊が与えられ、救われた証拠であるならば、すべての人に異言が与えられ、今でも異言を語るはずですが、聖書は異言を求めなさいとは言っていません。パウロもここで言っているのは愛です。当時、ペンテコステにあって、使徒の中で、救いが与えられた人に異言が起こされ、また異邦人の町サマリヤでも、救われた時、神のことばが語られる時に、確かに異言がありました。でも、すべての救われた人に異言が与えられたわけではなかったのです。もし異言が救いの証拠であるならば、救われていながら異言を語らない人はどうなのでしょう？聖書は、聖霊が与えられている証拠は愛であると言います。もちろん異言の賜物は、聖書が完成した時にすたれやみますとあるように、その賜物が既に今の時代にあってはすたれていることを、私たちはみことばから教えられています。聖霊があなたのうちに与えられ、救われた者が持っている特徴は聖徒に対する愛だと聖書は言います。この愛は現在形であるだけでなく、無条件に与える、絶えることのない愛です。聖霊が聖徒のうちにとどまり、愛を注いでくださるからです。また自発的な愛であり、周りの人から犠牲のように思われるような状況の中であっても、喜んでささげる愛を実際的に示そうとする愛なのです。良きサマリヤ人がけが人を見た時に駆け寄って、かわいそうに思って愛を示し、助けたように、人の必要を満たそうとします。ことばや口先だけでなく、行いと真実をもって愛そうとする愛です。ちょうど私たちの模範であったイエス・キリストが私たちの罪のために十字架について神の愛を示されたように、私たちも実際に愛を示すことにより自分自身に与えられている救いを、聖霊から与えられる愛を明らかにすることができます。

2) イエス・キリストの弟子であること

また二つ目に、この愛はあなたがイエス・キリストの弟子であることを明らかにします。コロサイ 1 : 4 にこの愛は「すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛」とパウロは述べました。コロサイの聖徒が持っていた愛は、一部の人に限った愛ではなく、神にあって救われた聖徒すべてに対する愛でした。この当時のコロサイの町や周囲の町も一致を保ったり、愛し合うのに非常に難しい状況があったことが明白なのです。コロサイ 3 : 11 で、パウロは「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」と述べました。今、この日本にあって、教会に集まって来られる方々には身分の違い、奴隷や自由人という区別はありません。でも当時の教会には身分の違いもあり、民族の違いがあり、ユダヤ人との違い、割礼の有無があり、未開人もあり、スクテヤ人もあり、いろいろな人たちがいたのです。しかし、パウロは 3 : 13-14 で「:13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあつ

でも、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。:14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」と、そこにあって救われた人が教会として一致を保つようにと教えました。そしてパウロはエパfrasからコロサイの教会の聖徒たちが救われた者として、聖徒たちに持っている愛を現わしていることを聞いたのです。

世の人たちは、イエス・キリストを迫害したのです。クリスチャンがイエス・キリストが主です、救い主ですという生き方をするならば、敬虔に生きる者はみな迫害を受けると書いてあります。でもクリスチャンは聖徒を愛し、神様にあって一致を保とうとします。ちょうどイエス・キリストが最後の晩餐の席で、ヨハネ13:34-35「:34 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と言っておられます。私たちは、兄弟姉妹を愛するという命令を主イエス・キリストから受けています。私たちが互いに愛し合うことを通して、私たちはキリストの弟子であることが明らかとなり、すべての人が認めると聖書は教えています。ピレモンでも、Iテサロニケでも、ほかの書簡でも、パウロは聖徒の愛を聞いて、その救いを感謝しています。救われた聖徒に証印として与えられている、証拠として与えられている聖霊の実である愛が、聖徒の信仰が生きて働いて実を結んでいることを明らかにしているのです。木があれば育ち、実を結びます。同様に聖霊なる神様が私たちのうちに働く時に、愛という実が明らかとなってくるのです。

あなたの愛はいかがでしょうか？聖霊の実である愛は、あなたの周りの人たちに明らかとなっているでしょうか？罪赦され、神を愛し、兄弟姉妹を愛するあなたの愛を見て、あなたがキリストの弟子であるということを認めることができるのでしょうか？私自身も神様のみことばから探られました。私たちが行いと真実をもって愛し合っていないならば、私たちはキリストの弟子としてのあかしができていないこととなります。もし私たちがそのようであるならば、私たちにできることがあります。その罪を悔い改めて、神様からの助けをいただいて、愛する者と変えられることを願うことです。実際に私たちが互いに愛し合うということは非常に難しさを覚える時があるのは、皆さんもよくご存じのとおりです。それについて、少し考えてみましょう。例えば、ご結婚されている方の中で、今まで夫婦喧嘩をしたことがないという方はおられますか？多かれ少なかれ夫婦での意見の衝突があったり、愛し合うことに難しさを覚えることがあると思います。でも聖書は夫に対して、「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」とエペソ5:25で教えられています。聖書の言うとおりで私たちが教えを受けるなら、いつも変わらず妻を愛することに難しさを覚えたとしても、夫は「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように」ですから、夫は妻のために自分をささげ、愛し、言いかえるなら、キリストがささげられたように十字架についてでも妻のことを愛することが命じられているのです。今、夫と妻のことで見ました。妻が夫に、教会がキリストに従うように従うことも難しいのですが、でもそのようにして、互いに仕え合いなさいとエペソ5章に出てきます。

同様に、ヨハネ13:34では、最後の晩餐の席でイエス・キリストは繰り返し「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と命令されました。この愛は感情ではなく、意思を伴うものです。感情でしたら、好きであったり、嫌いであったり、時間とともにその心は変化するでしょう。でも皆さんに確認したいことは、何があっても、まず自分が愛するという覚悟を決めておられるでしょうか？その決心をしておられるでしょうか？夫婦でもそうですが、どんな場合でも、まず自分が率先して自分のパートナーを愛すると決心し、実際に愛をもって仕えることが必要です。罪の問題に対しては、確かに愛をもって、みことばに基づいて解決する必要がありますが、夫婦においても、また教会において兄弟姉妹の間であっても、私たちがどのようにこの主の命令である愛を実践するのか、それが私たちの信仰のあかしとなるの

です。ですから、私たちは私たちの模範であるキリストの愛、自分を赦してくださり、罪のためにささげられた神の愛、キリストの愛を覚える時に、ほかの人を愛そうとしますし、聖霊なる神様の助けをいただいて兄弟姉妹を愛し、神のすばらしさを現すことを願って生きることができます。

○まとめ

聖徒は信仰の確信を持って生きることができます。なぜなら、私たち聖徒を罪から救い、信仰の確信を与えてくださるのは神だけです。そして神が聖書の示すとおりにキリストの十字架の死と復活を信じる信仰によって救いを与えてくださいます。神の約束であるみことばとあなたに与えられている聖霊が、私たちの救いの確証を与えてくれるものです。また聖徒は聖霊によって与えられる愛により神を愛し、兄弟姉妹を愛する者として自分の救いを確信し、神に感謝して生きることができます。皆さん、どうぞ今週も、そしてこれからも信仰の確信をしっかりと持って生きていきましょう。私たちが救われた者として、信仰の確信を神に感謝して生きていきましょう。それこそが私たちのクリスチャン生活であり、私たちの周りの人たちに対するあかしです。